

北インドにおける土器製作

—その儀礼的背景—

小磯 学

Pottery Making Tradition in North India
: Its Ritualistic Background

Manabu KOISO

南アジアのとくにヒンドゥー教社会においては、淨・不淨の観念を背景にした土器の需要が長く維持されてきた。土器は大量生産ができ、安価で容易に交換が可能であったことも理由のひとつであろう。一方日常的な利用とは別に、おそらくはその球状をなす形ゆえに、土器は豊穣や再生を象徴するものとして儀礼や祭の際に不可欠なものでもあった。また土器製作に用いられる各種の道具は、神聖なもの、あるいは特殊な力を備えたものとして扱われ、さらには土器職人そのものが「僧侶」の役割を担う場合が見うけられる。土器の製作と利用の「伝統」が消滅しつつある今日、あまり省みられることのない土器文化の広がりについて触れる。

キーワード：土器製作具の由来 道具の崇拜 土器と儀礼・祭 土器の象徴性 土器と邪視

In South Asia, especially among the Hindu society, the problem of purity and impurity is a great concern in everyday life. This belief may have been the major reason behind the high demand of pottery in the region, since the invention of pottery up to the present. Pottery is comparatively cheap and thus can be replaced easily whenever it is broken, after being used in rituals and festivals, or polluted etc. At the same time, pottery has been treated as the symbol of fertility, the womb or even the mother-goddess herself because of its round shape. Based on an ethnographic account of potters and manufacture of pottery at the village of Tarasara, Gujarat State, India, the author discusses the use of pottery in ritualistic contexts and the significance of symbolism of pottery. Pottery-making tradition has been studied and reported by various scholars since the end of the 19th century, but there are only a few works carried out on the symbolic aspect of it. Tools that are used by potters are believed to be gifts of gods. Therefore, these tools, as well as the potters themselves who use them are all regarded as sacred. These tools are believed to have certain powers that can assure fertility, cure problems and purify pollution. In some cases, the potters are also regarded as priests, who will bestow happiness to others and solve problems.

However, even among remote villages of India, the need and use of pottery is gradually decreasing, being replaced by factory-made aluminum, brass and stainless or even plastic vessels from towns and cities. The purpose of the present article is also to call attention to such critical situation of pottery-making tradition that is in peril of losing its long tradition.

Key-words : sacred origin of tools, worshipping of tools, pottery and rituals, symbolism of pottery, pottery and evil eye

はじめに

南アジアにおける素焼きの土器は、利便性や経済性、あるいは信仰上の理由によって、先史時代に登場してから現在に至るまで、その需要が高く維持してきた。水甕は滲み出す水分の気化熱によって中の水を冷やし(図1)、土鍋は炊いた御飯をほどよく蒸らす。また鉢はヨーグルトを作

る際に余分な水分を吸収してくれる。これらの土器は壊れやすい半面、村の伝統的な土器職人によって大量生産されており、安価で容易に交換が可能である。そしてこの容易に交換可能であることは、器が穢れた場合に直ちに破棄されなければならない淨・不淨觀がその根幹にあるヒンドゥー教社会にとって、きわめて重要なことであった。と



図1 水を蓄える（タラサラ村）

くにイギリスの植民地下で織物など多くの伝統的な工芸品が衰退していくなかで、土器はこうした理由から、村社会を中心にその後も長く需要を保ちえたのである（小西1989）。

しかし過去半世紀ほどの間に、そうした状況も徐々に変化しつつある。村の土器職人の家でさえ、一部ながら銅や真鍮、さらに近年ではアルミニウムやステンレス製容器あるいはプラスチック製容器など、昔ながらの流通ルートの外部から新たにもたらされた製品の日常的な使用が見られるようになっている。あるいは土器の製作や流通に際しても、電動ロクロを用いたり、トラックで1000キロを超える距離を移動しながら各地の都市を何ヶ月もかけて販売して回るなど、新たな動きが見受けられる。

こうしたなかで、より「伝統的な」土器製作が完全に消滅してしまう前に、その記録を残しておく意義は大きいと考えられる。製作技法にとどまらず、製品の流通、販売、購入、儀礼的な場合を含む使用や破棄、あるいは土器職人やその社会的背景など検討すべき課題は多い。このうち南アジアにおける製作技法についての観察記録はこれまで多数が報告されているが、その他の要素についての事例報告はいまだ少ないといわざるをえない¹⁾。

とくに考古学的事象においては、土器がどのような技法

で製作され、実生活でどのように（物理的に）使用されたかは類推することができても、土器がその著者あるいは使用者にとってどのような「意味」をもっていたかを知ることはきわめて困難である。しかし世界各地の民族例から知られるように、実際には日々の生活の中での土器の使用は、単に即物的な利便性にとどまるものではない。土器あるいは土器製作の体系全体には、さまざまな儀礼や信仰に関わる象徴的な「意味」が付与されている。当然ながらこれらを古代社会にそのまま当てはめて考えることはできないものの、人々の精神世界を投影した、まさに文化としての土器の世界を確認しておくことはきわめて重要であろう。そこには、暮らしの中で土器が果たす役割の多様性を垣間見ることができるからである。

こうした立場から、本稿では土器に関わるさまざまな要素のうち、とくにヒンドゥー教社会における儀礼的あるいは象徴的背景に限定し、俯瞰することを試みる。このため、1991年と1992年に筆者が留学先のデカン大学のソニヤ・B・カールとエリザベス・タマスらとともに行ったインド西部グジャラート州タラサラ村における土器製作の観察（Kar, Koiso and Thomas 1995）を基礎としつつ、インド北西部・中部一帯に伝わる土器の儀礼的背景について触れる。

グジャラート州タラサラ村の概況

タラサラ村はグジャラート州バーヴナガル県タラージャ郡の人口3500人ほどの村で、アラビア海に面したサウラーシュトラ半島の東沿岸に位置する（図2）。17ほどのジャーティー（サブ・カースト）集団からなり、先祖代々土器およびレンガの製作を伝えているクムバール・ジャーティーの人々は、親戚関係にある男性40人と女性20人ほどが9軒に分かれて暮らしている。このうち現在も土器製作に専業で従事している男性5人のほか、レンガ製作に専業で従事している男性2人がおり、これを妻や子供が手伝っている。後述するように、ロクロの使用は力を要することもあり男性のみが行なう仕事であるが、女性がこれをむやみに触ることはタブー視さえされている。作業を補佐する妻・娘の主な作業は、素地の準備、塗彩や彩文、焼成時の燃料の採集や窯への運び入れ・運び出しである。雨季の3ヶ月ほど（6月～8月頃）を除き、土器職人たちは窯で2回焼成を終えるほぼ二週間おきに周辺の村に土器を売りに出かけている。

過去20年ほどの間には成人しても土器製作以外の職に就く例が増加しており、その数は筆者の訪問時には23名にものぼった²⁾。それまでの世襲的な仕事の継承の体制がくずれ、「伝統」そのものが絶滅の縁に立たされているのが実情である。

1961年度の国勢調査では、使用されるロクロや当て具の

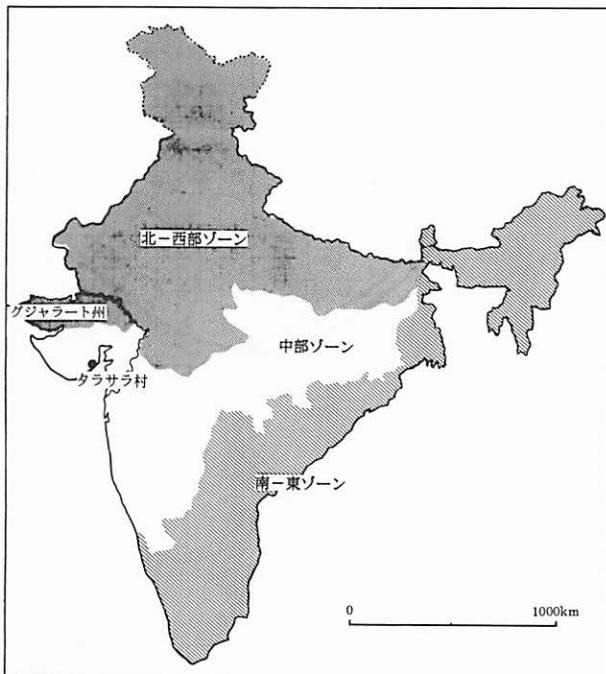


図2 インド土器製作の伝統的地理的区分
(Saraswati and Behura 1966に基づく)

形態、焼成法などに基づきインドにおける土器製作の伝統を地理的に北-西部・中部・南-東部ゾーンに大きく区分できることが指摘されている（図2）（Saraswati and Behura 1966: xiii）。グジャラート州全体はこのうち北-西部と中部の両ゾーンにまたがるが、タラサラ村は中部ゾーンに属することになる。すなわち、作業円盤に軸受けのある車輪形の手回しロクロで大まかな成形を行なったのち、叩きと握りのついた当て具を使って仕上げることを特徴とする。ただし国勢調査ではグジャラート地方は野積み（野焼き）焼成の地域とされているものの、タラサラ村では平地に円形の壁を設けた窯（半地下式の燃焼室を持たない）が使われている。

タラサラ村の土器器種構成

タラサラ村で製作される土器は22器種で、そのうちの16器種が日常的に使用される土器（図3 a、表1）、6器種が結婚式や葬式などの儀礼や祭専用に用いられる土器（図3 b、表1）である。これらのほぼすべての土器に赤色ないし黒色顔料が器面全体に施される（儀礼用の6器種には施さない場合がある）。また、大～中型の水やヨーグルトを蓄えるために使用されるgolaやdohniなど一部の土器にはさらに磨きが施されるほか、同じくgolaやmatloには白色と黒色でクジャクや魚、植物の文様などが描かれる。このような具象的な文様が描かれるものは、これら2器種に限定されている。

日常的に使用される土器は土器職人によって年間を通して製作されるが、儀礼用の土器は注文があつたり祭の際など一時的・季節的に集中して製作されることになる。儀礼用の土器はgarboを除くといづれも小型で必然的に安価であるだけでなく、後述する結婚式のロクロ儀式で用いるchakliとgujadiyoのように無料で消費者に渡されるものもある。儀式で用いられる土器のうち彩文が施されるのはchakliのみであるが、これは赤・緑・白色の縦の太い帯状文で、具象的な図柄が描かれることはない。

また村では土器職人の家を含めてghaggarと呼ばれる真鍮、アルミニウムないしステンレス製の中型の壺や同じく金属製の蓋やターリー盆、コップなどの使用が一般化しているが、これらは最寄の町で購入されている。このうちターリー盆はかなりの程度浸透しているが、これを除くと金属製品の使用は数の上では少数で、日常的に使用され需要が高いのはあくまでも土器である。

土器製作の道具とその神聖視

1. 伝承

タラサラ村の土器職人は、土器製作にあたってさまざまな道具を用いている。作業の中心となるロクロを初め、それに回転を与える木の棒や器面の調整に使用する布切れ、叩き板、さらには半恒久的な施設である窯をも加えるならばその主な道具の数は15にのぼる（表2、図4～8）。このいづれが欠けても、製品としての土器を完成させることはできない。さらにまた、ロバはその糞が未消化状態の纖維を適度に含み素地の混和材として最適とされるだけでなく、粘土や焼成用燃料（木の枝など）の採集、土器を周辺の村へ売りに出る際の荷役用として使われ土器職人らにとって不可欠の動物となっている。このため各家で1～2頭を飼育している。

こうした道具のうちとくに以下の4点が、必須の品として考えられている。すなわち、ロクロ、水壺、布切れ、糸である。これらは以下のような起源譚によって、その由来が語られている。

「土器職人最初の祖先は、プラジャーパティ・プラフマー神³⁾にまで遡る。この神にはダクシャという息子があり、このダクシャにはさらに4人の息子がいた。すなわちクムバKumbha、ハルシャHarsha、ギウシャGivsha、マンサMansaである。このうちクムバは神聖な土器職人で、永久に回りつづけるロクロをもっていた。

あるとき神々の宴会が催された折、ごちそうを食べ終えた若いクムバは、年上の神々がいまだ食事中であるにもかかわらず、立ちあがり挨拶もせずにその場から退出してしまった。この無礼に怒った神々はクムバを追放し、シヴァ神「よってロクロの回転も止められてしまった。クムバは

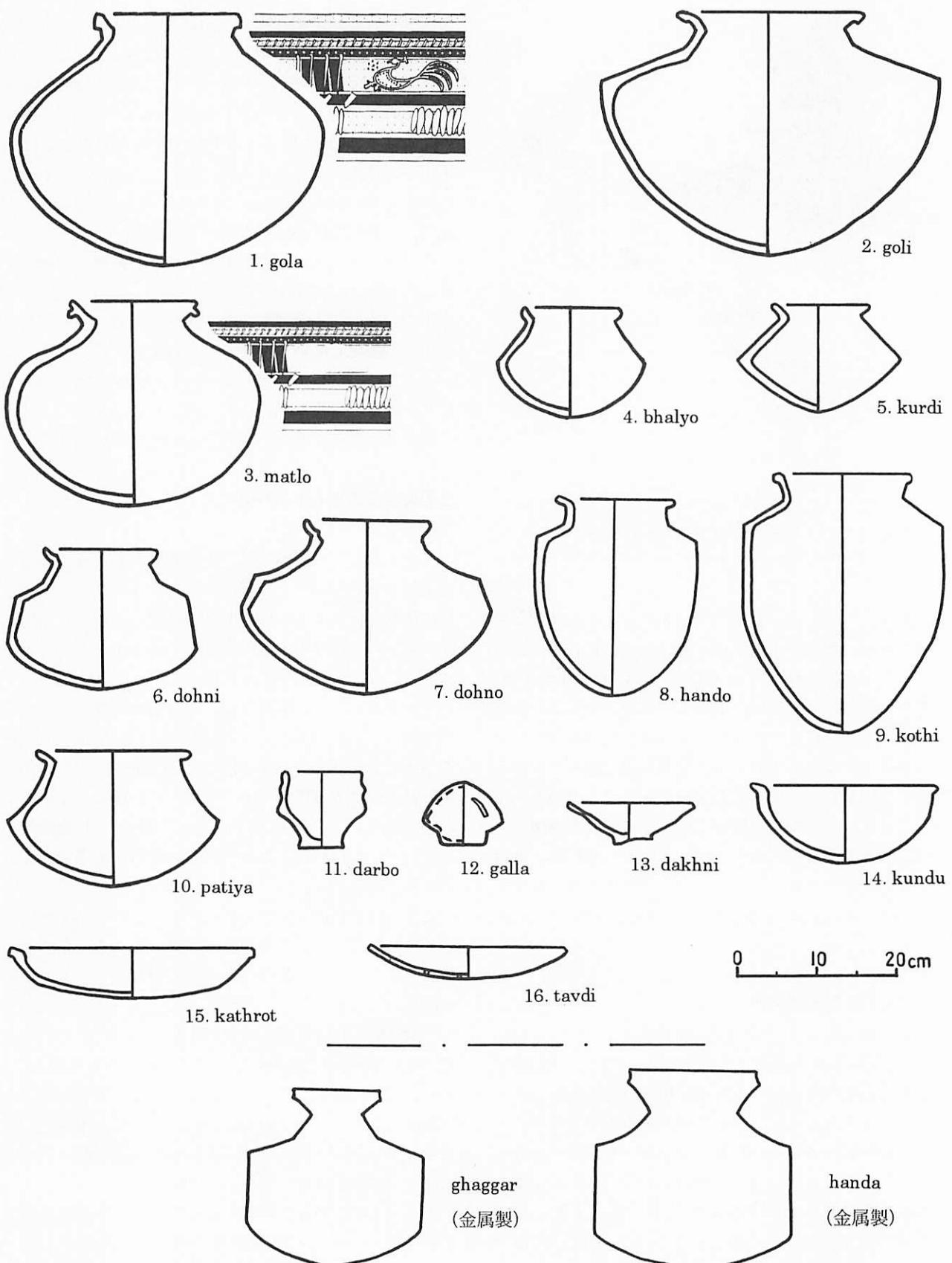


図3a 日常的に用いる土器 (タラサラ村)

表1 タラサラ村の土器一覧

器種	主な機能	塗 彩	磨 き	彩 文	値段(ルピー)
日常的に用いる土器					
1 gola	水	赤	有	有	15
2 goli	バターミルク	黒	有	無	25-30/40/ 60/100
3 matlo/a	水	赤	無	有	8
4 bhalyo	水	赤	無	無	4
5 kurdi/thopli	バターミルク	赤・黒	有	無	3
6 dohni	バターミルク	赤・黒	有	無	4
7 dohno	バターミルク	赤・黒	有	無	6
8 hando/i	水	赤	無	無	8
9 kothi	水・穀物	赤	無	無	10
10 patiya	調理	黒	有	無	5
11 darbo	塩	赤・塗彩なし	無	無	0.5
12 galla	貯金	赤	無	無	1
13 dahkni	蓋	赤・塗彩なし	無	無	1
14 kundu/a	鳥に餌	赤	無	無	2~3
15 kathrot	パン素地を練る	黒	有	無	4
16 tavdi	パンを焼く	赤	無	無	2.5
儀礼・祭に用いる土器					
1 garbo	灯明を入れる	赤	無	無	5
2 lotko	葬式の儀礼	赤・塗彩なし	無	無	1
3 chakli	ロクロ儀礼	赤	無	有	無料
4 gujadiyo	ロクロ儀礼	赤	無	無	無料
5 kodiyo	灯明	赤・塗彩なし	無	無	0.5
6 ramayyu	豊穣儀礼	赤・塗彩なし	無	無	無料

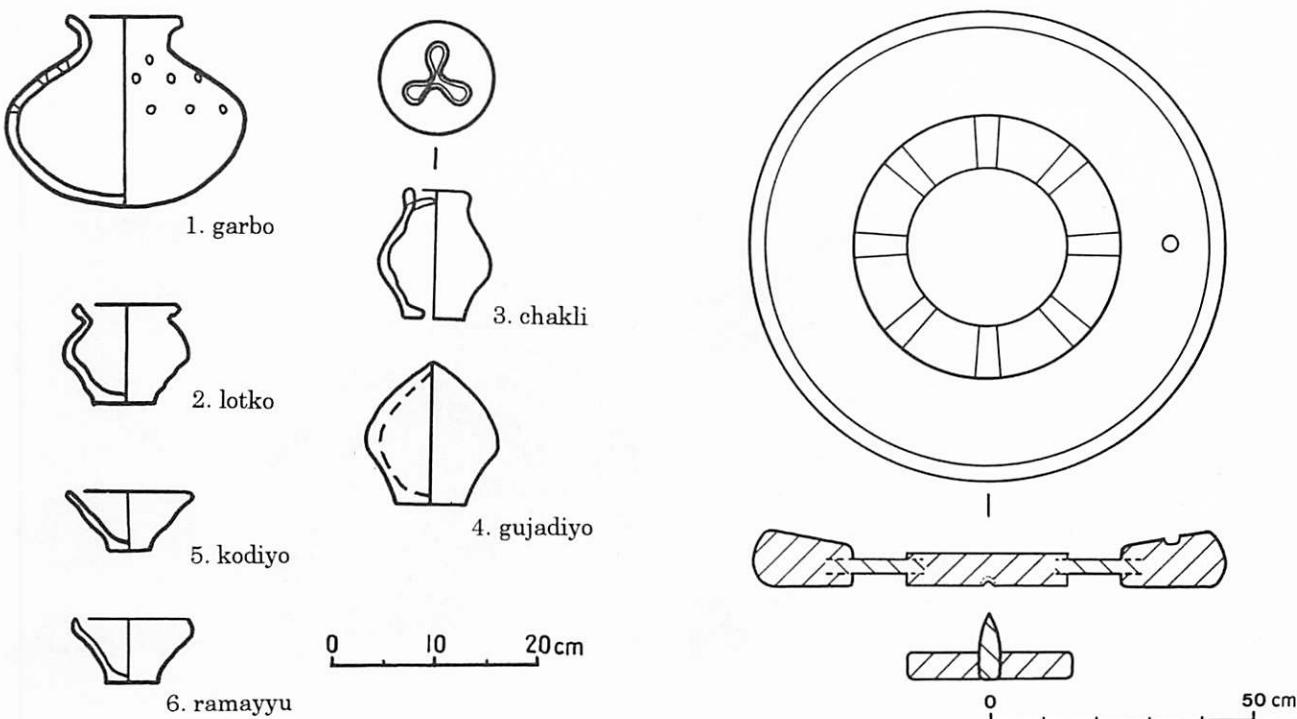


図3b 儀礼・祭に用いる土器 (タラサラ村)

図4 ロクロ (上) と回転軸 (下) (タラサラ村)

表2 土器製作に用いる主な道具

1 篩	素地の準備にあたり、粘土や混和材のロバの糞を均質に混ぜるために使用。3mm方眼の金属性メッシュ。
2 回転軸 (chokti) (図4)	台石にはめ込んだ木製の軸。直径4cm、台石からの高さ8.5cm。
3 ロクロ (chakra) (図4、6)	ロクロの形状はインドの各地方ごとに異なり、円盤形のものや幅をもつ車輪形のものがその基本的な形状となる。タラサラ村で用いられるロクロは、後者である。外径90cmほど。
4 ロクロ棒 (danda) (図6)	ロクロの外縁部に掘り窪められた小穴に差込み、回してロクロに回転の弾みをつけるために用いる。長さ90cm、径3cmほど。
5 水壺 (kamandalu) (図6)	土器製作の際にロクロの傍らに置き、作業で使う水を入れておくもの。Kamandaluはより一般的な名称で、タラサラ村ではdohniなどが適宜用いられている。
6 布切れ (langot) (図5、7)	ロクロ上で成形した土器の器面の調整・仕上げに用いるためのもの。長さ20cm、幅3cmほど。
7 糸 (janeyu) (図5)	ロクロから土器を切り離す際に用いる綿の糸。長さ40cmほど。
8 スクレーパー (kharpiyo)	ロクロで大まかな成形を終えて乾燥させたのち、叩き作業の前に、乾燥の度合いの著しい底部を削り取るために用いる。6cmほどの鉄製籠。
9 叩き板 (pati) (図8、9)	木製で、大工が作製。大小各種あり。
10 当て具 (pinda) (図8)	土器職人自らコンクリートで作製。
11 布 (kapra)	顔料を器面に塗付する際に用いる。
12 磨き具 (krangsha)	径3cmほどの植物の実を束ねたもので、これを器面に擦りつけて研磨する。
13 トウジンビエ (bajra) の穂先	彩文を施す際に筆として使用。
14 窯 (nibhado, bhatti)	レンガを使用した径2.7m、高さ85cmほどの円形窯。燃焼室を持たない平地式。
15 篠 (lugdu)	ロバの体の左右に掛け、粘土や燃料、製品の売りだしの運搬などに使用。

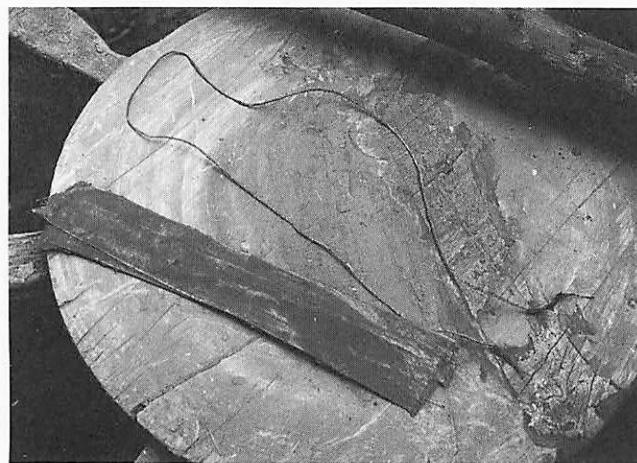


図5 布切れと糸 (タラサラ村)

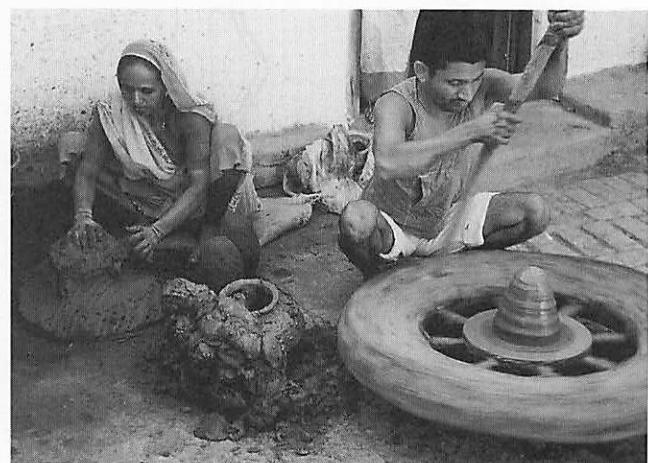


図6 ロクロを回す (タラサラ村)



図7 器面の調整（タラサラ村）

許しを請うたが、永久に回るロクロの回転が戻されることはなかった。ただし土器作りを生業として生きていくために、プラーフマー神が水壺を、シヴァ神が布切れと糸を、ヴィシュヌ神が新たに（自分で回す）ロクロを授けることになった。」(Kar et al. 1995: 144-145)

こうした伝承は、グジャラート地方の他の地域やさらに北のラージャスターからパンジャーブ地方にかけてのインド北-西部においても、やや形をかえて伝えられている。また、登場人物の属するジャーティーや道具を与えた神々の名前にヴァリエーションを示しながら、ほぼ同様の伝承は、以下のようななかたちでマハーラーシュトラ地方を含む北インド全域に分布しているという。

「はるか昔、人間と神々が自由に行き来していた黄金のサトユガの時代、シヴァ神がヒマラヤの娘パールヴァティーと結婚することになった。しかし結婚式を執り行うためには儀礼で使う壺が必要であった。このときバラモンのクララク Kulalak なる人物が、必要な道具を提供してもらうことを条件に土器を作ることを申し出た。こうしてプラーフマー神は器面を整えるために用いる亀を、シヴァ神はロクロを回すための棒と布切れと水壺、糸を、ヴィシュヌ神はロクロを与え、めでたく土器が作られることになったのである。以来クララクの子孫は今日に至るまで、土器作りに従事しつづけている。」(Saraswati 1978: 80-81)。

ここでは必須品は6点となり、器面調整のための亀とロクロ棒が加わっている。亀が実際に使用されている例を確認していないが、通常は丸い滑らかな石や木の実が磨き具として用いられている。

一方とくにロクロに関しては、サウラーシュトラ半島を中心に、以下のような伝承も伝えられている。「かつてロクロは、一度はずみをつけると用意した粘土が終わるまでずっと回転をつづけていたものである。ある日、王が派遣した使者が土器職人を訪れたおり、仕事中であった職人は

使者にしばらく待ってくれるよう頼んだ。ところがこれに腹を立てた使者は怒ってロクロを靴で蹴ってしまった。こうして穢れたロクロは、回転しつづけることをやめてしまった。それ以来職人は、作業のたびに棒で何度も繰り返しロクロを回さなければならなくなってしまった。」(Saraswati 1978: 85)

タラサラ村の場合を含め、これらの神話・伝承はいずれの場合も土器製作に用いる道具が神々から直接授かった神聖なものであり、したがって土器製作そのものが神聖な行為であることを説明する内容となっている。ロバの糞を扱うことなどからカースト社会全体における位置づけが低く見られがちな土器職人⁴⁾を、かつては神と同列ないし神聖な地位にいたと説明することである程度の権威づけが試みられているといえよう。

しかし前述したように、土器製作に必要な道具は伝承に登場するものだけではない。なかでも、成形に必要な叩き板と当て具が語られていないのは疑問として残る。この伝承に登場するのは、いずれもロクロとその上で行なう作業に使用する道具に限られている点に特徴がある。インド東部のアッサム地方やインド南部の一部の地域では、ロクロを用いず回転台や叩きのみを使って土器を製作しており、ロクロを用いない世界各地の事例の場合同様、これらの土地での土器製作もまた女性の専業である (Aiyappan 1947; Das 1956; Bandopadhyay 1961)⁵⁾。こうした事実と伝承が語る内容とは、何らかの関連をもつのであろうか。

一方、ロクロを使用しているインド北-西部・中部の土地の多くでは、建前上、叩き板と当て具はむやみに女性が触れてはならない物とされている。また後述するように、一部の地方では叩き板は穢れた身体を浄化する力をもつとさえ信じられ (Saraswati 1979: 85)、特別視されているという事実がある (図8、9)。ロクロの導入とともに、男性と女性の専業・分業が確立していく歴史的過程がこうした背景に窺えるのかもしれない。当然ながら、前述の起源譚がいつ頃から語られるようになったのかということも合わせて問題となろう。叩き板と回転台を使用する伝統とロクロを使用する伝統と、あるいはロクロと叩き板の両方を併用する伝統とが、いつ頃から現在のような地理的分布を示すようになったのかは興味深い課題である。

2. 土器職人ジャーティーによる道具の崇拜

土器製作で用いられるそれぞれの道具は、単に作業で使われるにとどまらず、儀礼などの際に崇拜の対象となり呪術的な目的や身を清めるためなどに使用されることがある。これは伝承にもあるように、神々から授かったものであるため神聖視されているからである。ただしこうした道具への特別視は土器職人らに限定されているわけではなく、後述するロクロ儀礼のように、むしろ他のジャーテー

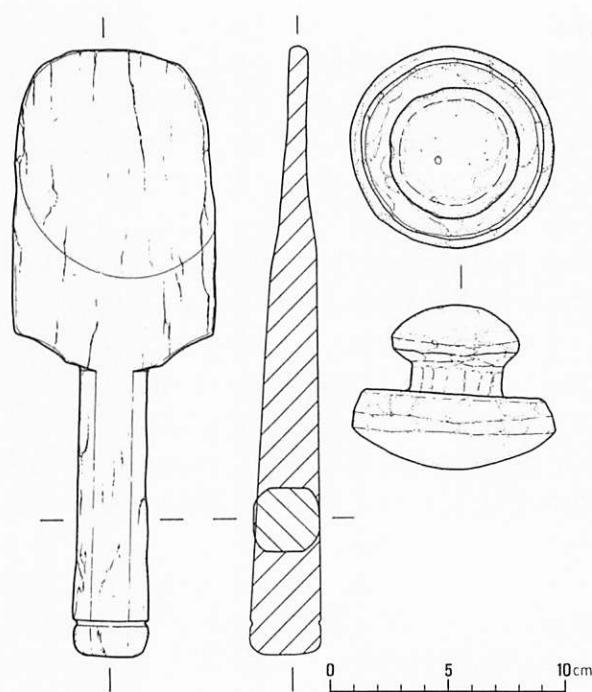


図8 叩き板と当て具（タラサラ村）

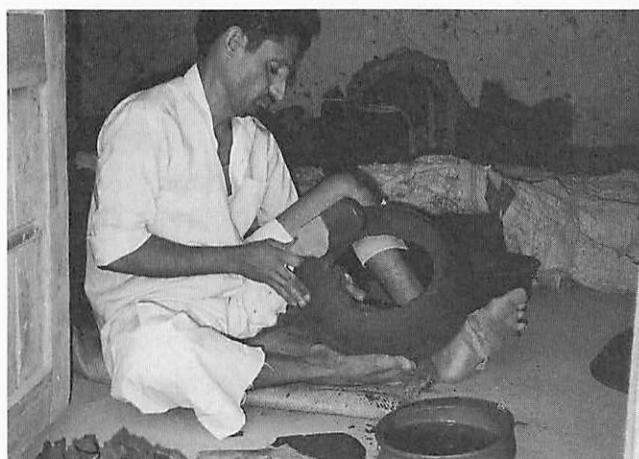


図9 叩きによる成形（タラサラ村）

の人々によって信仰の対象となって受け継がれている。そのもともとの発端には、火を用いて土を形ある土器へと変化させることへの畏怖が存在しているのかもしれない。いずれにしても、道具の神聖視・崇拝には、土器職人ら自身による場合とその他のジャーティーの人々による場合と、ふたつの側面がある点を指摘しておきたい。

伝承に語られる神々から授かった道具とともに、とくに(男性が)ロクロを使用する地方においては、叩き板や当て具もまた、特別な力をもつと考えられている場合が多い(Saraswati 1979: 85)。これらの道具には、毎朝仕事を始める前に簡単な祈りが捧げられるだけでなく、雨季(6~9月頃)明けの仕事始め、ナヴァラートリ、ディワーリー、

シヴラートリーといった一年の主要な祭の折や日食が起きた次の日などにも祈りが捧げられる。窯に対しても同様である。日々の祈りでは、右手で水を振掛け、ガネーシュ神やシヴァ神、あるいは工芸の神であるヴィシュワカルマ神などに対して仕事がうまく行くよう祈りの言葉を捧げるにとどまるが、祭の際には香を焚いて道具に朱粉をかけ、さらに菓子やココヤシ⁶⁾を捧げることを行う。聖性を象徴する、ラーキーと呼ばれる麻紐を巻きつけることもある。

土器製作と女性：道具が神聖であることはすなわち「淨性」が高いことを意味し、したがって「不淨」な女性⁷⁾がこれらに触れて穢れてしまうことを避ける傾向が見られる。妻や家族の女性は作業を手伝う立場にあるので、その際これらの道具を夫に手渡しする場合などこうした原則が厳密に守られているわけではない。素地作りや器面調整(磨きと塗彩、彩文)は基本的に女性の仕事であるだけでなく、焼成に用いる燃料(枯れ木など)の採集、窯への運び入れや運び出しなどは夫との共同作業であり、女性は重要な労働力であることにかわりはない。もっとも、たとえ女性が道具に触れることにそれほど神經質でないにしても、女性がロクロや叩き板などを使って実際の作業を行なうこと、また窯の火入れ(点火作業)を行なうことは禁じられている。女性のものとされる彩文を描く作業の場合でも、生理中の女性がこれを行なうことはタブーである⁸⁾。

3. 他のジャーティーによる道具の崇拜

1) ロクロ儀礼 chakra (chak) puja

パンジャーブ、ラージャスター、グジャラート各地方を中心とする北インドで、主に高カーストの人々によって結婚式の一端として行われている儀礼。新郎新婦、あるいはタラサラ村の場合にはそれぞれの親族の男女が、土器職人の家に赴いてロクロを祀る(図10)。タラサラ村の場合では、バラモンやパーリーワール(バラモンの支流)のほか農耕集団のカンピー、ダルバルの各ジャーティーのみに伝わる習慣となっている。ただし、土器職人であるクムバル・ジャーティーの結婚式ではこの儀礼を行なうことがない点が大きな特徴といえる。隣村のババダ村のようにほぼ全ジャーティーがロクロ儀礼を行っている場合でも、やはり土器職人たちは行なわないという。かつてはバラモンのみが行なっていて、これが徐々に他のジャーティーに広がったとも考えられるが、定かではない。

ロクロ儀礼は結婚式全体の開始を告げる儀礼でもあり、マンダプ mandap と呼ばれる式場の「祭壇」が設営される3日前に行なうこととされている。新郎新婦にかわってその親族の場合は、新郎側からは新郎の姉妹(または新郎の親族の女性)、新婦側からは新婦の兄弟(または新婦の親族の男性)がそろってこの儀礼を行なう。彼らふたりには主に女性を中心とする親族や友人らが伴い、ときには太鼓



図10 ロクロ儀礼（グジャラート州クンターシー村。円盤形のロクロ）

叩きなどを招き賑やかに村内を練り歩き、村の任意の土器職人の家（作業場）に赴いて執り行う。

少なくともタラサラ村の場合には、土器職人がロクロ儀礼を行なう家族からあらかじめ訪問の連絡を受けることはない。小麦の種蒔きが終わり農作業が一段落する冬の乾季の結婚式シーズンになると、どの家で結婚式が行なわれるかが人々の日常の会話に上り、関係者がいつ頃ロクロ儀礼で訪れるかは土器職人らも自然に知るところとなる。そして、一行が儀礼のあとに持ち帰るためのふたつの土器（chakliとgujadiyo）（図3 b）をあらかじめ作り準備しておく。この他にはとくに準備をすることはない。

作業場となっている中庭を一行が訪れると土器職人は作業を中断し、粘土を取り払いロクロを壁に立てかける。浄化作用があるとされる牛糞を水に溶いたものを、土器職人がロクロに塗りつける場合もある⁹⁾。新郎の姉妹の女性が右手の薬指でこのロクロの表に朱粉（kunku, kumkum）¹⁰⁾をつけ、あるいは吉祥を表す卍（swasitika）文様を描いて祀る。さらに朱をつけた場所にはひとつまみの米粒を捧げる。前述したように、普段は女性がロクロに触ることはタブー視されているものの、結婚式を迎える女性は創造神プラジャーパティーの娘パールヴァティーと同一視される

ことから、この儀礼に際しロクロに触れることができるものである。

土器職人の妻には吉祥・豊穣を象徴するココヤシの実とターリー盆一杯の小麦（ないし米、あるいはケツルアズキの豆）、碗一杯の粗糖が供物として渡される¹¹⁾。その返礼として、あらかじめ製作してあった1対の土器（chakliとgujadiyo）を土器職人の妻から受け取る。これらの土器にはいずれにも赤色顔料が施され、とくに前者には白と緑の縦縞の文様が描かれている。タラサラ村の場合には底部に穿孔のあるchakliを上端がやや尖り砲弾形のgujadiyoの上に重ね¹²⁾、新郎の姉妹が頭の上に乗せて再び太鼓叩きなどを伴って賑やかに帰宅する。

全体で5～10分程度で終了するこの儀礼の間、タラサラ村の場合には土器職人は傍らで見守っているのみである。しかしあつては儀礼の際に、訪れる一行を「僧侶」として祝福したという。他の地域においても、土器職人が「僧侶」として新婦をロクロに座らせこれを半時計回りに7回まわすなど、積極的に儀礼を執り行う例が報告されている（Crooke 1926: 331; Saraswati 1978: 82-83）。また土器職人がいない村の場合には、最寄の村の職人があらかじめ作った小型の模型のロクロが寺に納めてあり、これを儀礼の際に使用する。

ロクロ儀礼の解釈としては、土器製作の際にロクロの上に置かれる粘土の土柱がシヴァ神の象徴である男性性器リング（リングム）を表し、一方ロクロが女性性器を表すと考えることもできる。したがって、ロクロはまさに万物創生の車輪chakraそのものを表し、これを祀ることが豊穣儀礼、あるいは子孫繁栄の願いを込めた請願儀礼として結婚式の一部に取り入れられたことになる（Saraswati 1979: 89）。儀礼の際に渡されるふたつの土器についても、底部の穿孔やその形状が男女の性的結合を象徴していると考えることは十分可能であろう。

2) 道具のもつ力

ロクロが崇拝の対象となったり土器職人らが僧侶の役割を担うだけでなく、インド北西部の各地では土器製作で用いられるその他の道具にも治癒力や浄化作用などの神秘的な力が備わっていると信じられている。村の住民は以下のようない状況に置かれると土器職人のもとを訪れ、それぞれの道具に備わったこうした力の恩恵を期待するという（Saraswati 1979: 83-89）。

(1)妻が家を出て行ってしまった場合の夫の対処法。ロクロから一握りの粘土を取り、妻に気づかれないようにそれを飲ませる。すると妻は夫のもとに戻り、それ以後二人は幸せに暮らすことができる。

(2)痘症の対処法。患者は、土器職人の家から採取した粘土を患部に当てれば直すことができる。

- (3)体の一部が麻痺した場合。ロクロから土器を切り離す際に用いる糸を、患部に巻きつける。ただしこれは(土器職人以外には?)誰にもみづからぬように行なわなければならない。
- (4)インド中部マディヤ・プラデーシュ州北部のブンデルカンド地方では、人が亡くなったあとの服喪期間が終了したあと、左手に叩き板、右手にペルノキの葉をもち、これらを7回交互に持ち替えることで体が浄化され、通常の生活に戻ることができるという。その際には、バラモンや他のジャーティーのメンバーにお布施を捧げたり祝宴を開くことが必要とされる。
- (5)ウッタル・プラデーシュ州では棒に紐で繋がれた雌牛が死んだ場合、その紐を最後に結んだ人物が穢れると信じられている。その身を清めるには、雌牛の尻尾の毛を結んだ棒を持って3日間近隣の村を回り人々から施しを受け、最後に土器を焼く窯の灰をかぶらなければならぬ。同様に、土器職人の家に3日間泊まり、その際灰を敷きつめたベッドに寝ることで身を清める場合もある。この場合にも、バラモンや他のジャーティーのメンバーにお布施を捧げたり祝宴を開くことが必要である。

「僧侶」あるいは「呪術師」としての土器職人

土器職人は結婚式のロクロ儀礼以外にも、各地において「僧侶」の役割を担う場合が報告されている。インド中西部のマハーラーシュトラ地方では、牧畜民として知られるダンガルが葬儀を執り行う僧侶として土器職人を招くという。また天然痘が流行した際には、この病の女神スイータラマーターをなだめてもらうために、同様に土器職人を呼び祈りを捧げてもらうことが広く知られている。この女神の乗り物(vahana)がロバとされることから¹³⁾、土器職人が所有しているロバにも菓子などが与えられる。

同様に、インド中部のマディヤ・プラデーシュ地方北部では、ブーミヤラーニーというリューマチを起こす女神をなだめる場合に土器職人が呼ばれる。村によってはこの祈りを捧げる場所として寺の近くに「事務所」が設けられ、日曜日ごとに遠方からも患者が訪れ、順番に「僧侶」に祈りを捧げてもらうのを待つ。こうした患者からのお布施の形での収入はかなりの額になるという。

さらに同地方のスンガリアと呼ばれる土器職人らの場合は、豚を食することで知られるゴンディ族にとってなくてはならない存在となっている。この部族が信仰するブーラデーオ神とバーインサスル神に仕える僧侶が、土器職人であると信じられているからである。水牛やニルガイ(カモシカの一種)、あるいは風によって畑の作物が荒らされてしまうと、それをこれらの神々の仕打ちと信じ、それ以上被

害が出ぬよう、神々が喜ぶ唯一のささげ物である豚を供犠しなければならない。サンガリアの土器職人らはこのために豚を飼育しており、ゴンディ族の人々は自らに代わって彼らに豚を供犠してもらうのである。このバーインサスル神は畑の隅に立てられた石板の形で祀られており、ここで土器職人によって豚が供犠にされ、またその支払いが受け渡されることになる。土器を作ることをやめ、豚の飼育あるいは僧侶の仕事に専念するようになった家族も多いといふ。

一方やはりマディヤ・プラデーシュ州の同じくブンデルカンド地方では、土器職人らが儀礼を執り行う僧侶という側面にとどまらず、村の生活全般に災いや幸福をもたらす特別な力を所有していると強く信じられている。その一例が、雨季の到来が遅れ旱魃となったときに、それを土器職人らが雨が降らぬよう特別な祈願をしたためだとする考え方である。雨季には土器製作が中断されてしまい、仕事にならないからというのがその理由である。ときにそれは、村人による土器職人の襲撃という暴力事件にまで発展することがあるという。そこまで発展しないまでも、土器職人は、粘土でシヴァ神の象徴であるリング(男根)を作り井戸に沈め、雨をもたらす儀札を行うことを要請される。

このほかさらに、以下のような場合に土器職人を訪れることがある。

犬に噛まれた場合：土器職人に粘土の馬を作ってもらい、これをバッチャーダーダー神に捧げる。

敵視している人物を懲らしめる場合：インド北西部ではロクロは通常半時計回りに回転させて作業するが、これを時計回りに回して灯明皿を作ってもらう。新月の夜にこの灯明を灯すと、敵視している人物に災厄をもたらすことができる。この依頼に対する土器職人への支払いはかなりの額になるという。(Saraswati 1987: 82-83)。

ちなみにタラサラ村では、土器職人のひとりが薬草の知識をもった宗教的な人物と信じられバヴァ Bhavaと呼ばれていたが、その背景には職人らがもつとされる力への信仰が読み取れるのかもしれない。

儀礼や祭における土器の使用

全章で触れた道具への崇拝とともに、製作される土器そのものを儀礼や祭の場で使用することが多い。これはインドにおけるヒンドゥー教社会の大きな特徴といえるであろう。同様の儀礼・祭礼にしても地方や宗派、カースト(ジャーティー)によってさまざまに異なる祭祀が行なわれるが、タラサラ村の土器職人から得た情報の数例について触れておく。

1. 結婚式

前述のロクロ儀礼で触れた土器職人の妻から渡される土

器 (chakli と gujadiyo) にとどまらず、結婚式にはこのほかにも土器を伴うさまざまな儀礼あるいはしきたりがみられる。土器が使用されている主だった場を以下に列記してみよう。

新婦の家の門：タラサラ村では結婚式当日、新婦の家の門の上に bera と呼ばれる、ココヤシの実を乗せ全体がビーズ細工などで飾りつけられた 3 つの壺が並べられる（図11）。現在これらの壺は金属製であるが、かつては土器が用いられたと考えられる。この 3 つの壺の意味についてはすでに慣習となっており明確な答えを得ることができなかつたが、ロクロ儀礼で渡される土器が赤・緑・白の 3 色で塗られることと関連をもつ可能性もある。

新郎の到着：結婚式当日、新郎は新婦の家に彼女を迎えて訪れるが、その際上下に重ね糸で結ばれた 2 つの小形の鉢 (kodiyo) が 2 対戸口の両側に置かれる。それぞれ下の鉢の中には 1 ルピー硬貨とビンロウジュの実が入れてあり、新郎はこれらを踏み壊してから家の中に入る。

「祭壇」：新婦の家の敷地内には、mandap と呼ばれる「祭壇」が設けられる。これは積み上げた 8 つの壺¹⁴⁾を 4 組、2 ~ 3 m 四方ほどの空間の四隅にそれぞれ 1 組ずつ置いたものである。すなわち 32 個の壺によって聖なる結界がつくられていることになる。新郎新婦は僧侶とともにその中に座し、結婚式を執り行う。ここでの式のあと、新婦の

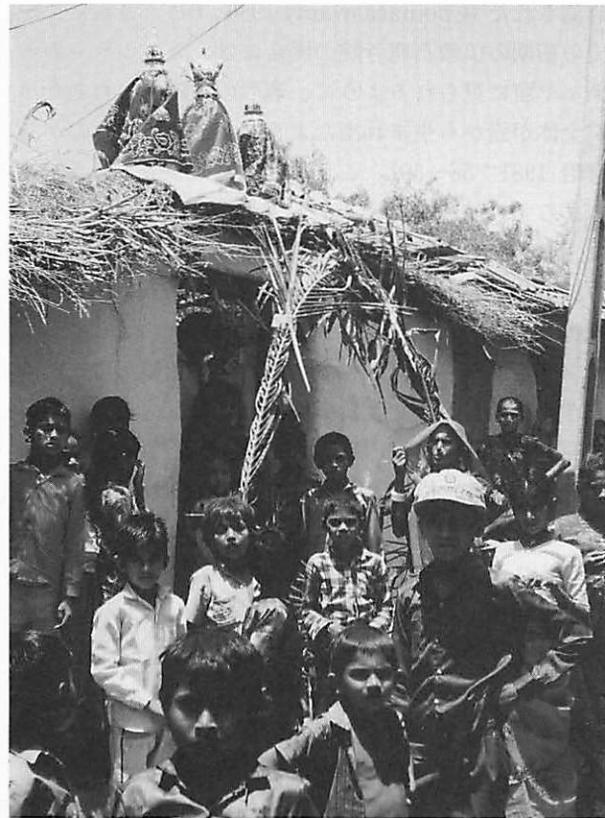


図11 新婦の家の門を飾る 3 つの壺（タラサラ村）

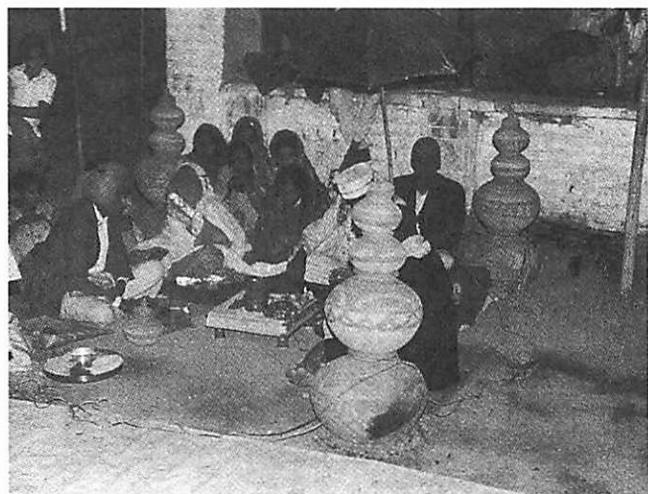


図12 結婚式の「祭壇」（マディヤ・プラデーシュ州ダングワラ村）（Miller 1985）

父が米とケツルアズキで満たしたひとつの壺を新婦に渡し、新婦は新郎の家に到着後これらを調理して義理の両親や兄弟らに振舞う。また祭壇の壺は、両家に半分ずつ分けられることになる。祭壇の四隅に積み上げる土器の数は地方によって異なり、マディヤ・プラデーシュ州などの例では 4 個程度の場合もある（図12）。

2. 誕生式

妊娠した女性は、赤ん坊の誕生がせると実家に戻る。赤ん坊が誕生すると、タラサラ村では助産婦 (suyani) が村内を練り歩きながら声をあげこれを人々に報告する。その際、男の子の場合にはステンレスのターリー盆を大きく叩き、女の子の場合には土器の蓋 (dhakni) を小さく叩いて回る。かつては男の子の場合にも土器が用いられたという。村に二人いる助産婦のうちひとりはクムバール・ジャーティーの女性であるが、土器職人の家で子孫繁栄を願うロクロ儀礼が行なわれることと関連があるのであろうか。ちなみにもうひとりはモチ（靴職人）・ジャーティーの女性である。

3. 葬式

葬式は男性が中心に行なう儀礼であり、長男が喪主となる場合が多い。喪主は火葬場に向うときには壺 (dohni) の中に灯明 (kodiyo) を灯して歩き、火葬後は灰の一部を小形の壺 (lotko) に納め、タラサラ村ではのちにこれを海に流している。3 日後になると空の壺 (matlo) を火葬した灰の上に置く儀礼 (thadi pujan) がある。亡くなったのが男性であれば 12 日後、女性であれば 11 日後にはさらに大掛かりな儀礼 (barvi もしくは matli kalpi) が行なわれる。これは 4 個の壺 (matlo) を積み上げたものを 12 組用意し、その 4 組ごとに最上部に蓋 (dhakni) を置き、その中に親戚一同が菓子と硬貨を納めていく。壺にはいずれも水が注

がれ、家に持ち帰り門の外に据え置かれる。

4. その他の儀礼・祭

九夜祭 (Navratra, Dashera) : 9~10月頃、マハーカーリー女神を祀り、満月に向けて10日間行なわれる祭礼。秋蒔きの小麦の予祝の意味をもつとともに灯明を灯す光の祭としても知られ、それぞれの家業で用いている道具を祀る。タラサラ村では肩部に多数の孔を開けた壺 (garbo) をすべての家で使うため、土器職人はこの祭が近づくと多忙となる¹⁵⁾。この土器にはまずひとつかみの小麦とモロコシもしくは米が入れられ、その上に灯明 (kodiyo) が置かれて蓋 (dhakni) がされる。夜には garbo の孔から中の灯明の光がもれ、美しい。祭の10日目になると、女性たちがビーズ細工で飾ったこれらの壺を頭に乗せ、村南端のマハーカーリー寺院に赴く。それまでには、あらかじめ祭初日にこの寺院の前に植えたモロコシが芽を出しており、その中央に壺を置く。このモロコシの芽は女神に捧げるために刈り取られ、その後壺は海に流されて祭が終了する。またとくに土器職人の家では敷地の一角に設けられた祖先を祀る祠に水を満たした壺 (bhalyo) を供え、モロコシを植えた小形の鉢 (ramayyu) をその上と周囲に並べて繁栄を祈る。

ガウリー女神への請願儀礼 (Gauri puian, Gauri vrat) : 6~7月頃、若い女性が良き伴侶に巡り合えるよう、ガウリー女神（パールヴァティーと同一視される）に断食とともに祈りを捧げる請願儀礼。ここでもまた小麦とケツルアズキを鉢 (kundu) などに植え、5日後わずかに芽が出たところで海に流す。

地鎮祭 : 新たに建物を建てるに当たって、水を満たした壺 (dohni) とココヤシの実を基礎の下に埋納する儀礼。

土器儀礼・占い : マディヤ・プラデーシュ州の事例に、小麦の収穫が終わった4~5月頃に行なう土器を祀る儀礼と土器を使った占いがある。ひとつかみのモロコシの上に水を満たした壺を置き、器面に朱粉をつけバターや砂糖を捧げて祀る。しばらくして内側から器面に滲み出す水滴を観察する。東西南北のどの方向に水滴ができるかによって、その年はいつ頃雨季が始まるかを占うもの (Miller 1985: 132-133)。

土器の象徴性

1. 豊穣多産・再生の象徴

前章で触れたような土器の儀礼での使用例は、枚挙にいとまない。貯蔵や調理など日常的な使用とともに、土器はこのように儀礼の場においても不可欠な存在となっている。土器は安価で容易に入手できることから、頻繁に行なわれる儀礼の度に新しい土器を用いることが促進されたことであろう。今日見られるようなかたちで土器が儀礼や祭礼に用いられるようになったのがいつ頃からかを特定する

のは困難である。しかし壺などがその球状の形ゆえに、豊穣や子宮、あるいは再生を象徴するものとして古来より位置づけられてきたことは、断片的な資料からも窺うことができる。

先史社会では骨壺葬に際して土器が用いられた例が、前四千年紀に遡るパキスタン西部のバローチスター初期農耕村落や前二千年紀のパキスタン東部のH墓地文化などに知られている (Gupta 1972)。これを土器に再生の意味を託していたためとらえることも可能であろう。また同じく前二千年紀のデカン高原に展開した金石併用諸文化では、幼児の埋葬に合わせ口甕棺葬が行なわれ、子宮回帰あるいは再生を願ったものとされている (Chakravarty 1971; Dhavalikar 1984: 77)。

しかし壺の象徴性について今日に至るまでもっともよく知られているものが、壺から蓮華の花などが咲き乱れる「満瓶 purna-kumbha, purna-ghata」¹⁶⁾の表現である。インダス文明のチャヌフ・ダロから出土した1点の印章に類似したモチーフが見られるものの (Joshi and Parpola 1991: 334)、前1200年頃に編纂されたと考えられる『リグ・ヴェーダ』に登場する「水で満たされた壺」や「祈りが捧げられた壺」などが最古の事例とされる (Chandra 1983, 1996)。

美術的な表現では、紀元前2世紀頃にまで遡るパールフトやサーンチーなどの初期のストゥーパ(仏塔)の欄楯に、ヤクシー(豊穣・多産の女神)と関連づけられながら好んで彫刻された (Coomaraswamy 1980: 61)。さらに、紀元前後の初期の佛教石窟寺院の場合には、カールラーのチャイティヤ窟に見られるように、壺形の柱礎をもちあたかも寺院全体が壺から生まれ出たようなデザインのものがある

(宮治 1981: 58-59)。こうした豊穣の象徴というだけにとどまらず、前述のマディヤ・プラデーシュ州の事例のように、壺そのものが崇拜の対象となったり女性と同一視されることも、古代社会においてすでに見ることができる (Nandi 1968)。

インド各地から報告されている後産の胎盤が壺に納めて埋葬される場合もまた、新生児の分身とも信じられている胎盤を他者の干渉から保護するという重要な目的があり (Ghurye 1937; 木下 1981: 104-105)、それは第二の子宮でもあったろう。

こうしたことから、今日の儀礼や祭で使用される土器の背景にも同様に、豊穣・多産・再生といった意味づけがなされており、その伝統が古くまで遡ることが推測できる。

2. 「貧困」の象徴としての土器と邪視

豊穣多産とはまったく逆に、土器には「貧困」を象徴させることもある。それが邪視除けに際しての土器の使用である。世界各地で古くから見られる邪視信仰は、南アジア全域においても今日なお非常に根強い。インダス文明の土

器や装身具の文様が邪視除けを目的としたものとする解釈があるとともに、今日用いられているさまざまな護符の最も重要な目的が邪視(nazar)への対策であるといえる¹⁷⁾。新築中や新築家屋の屋根の上や軒先に布製の人形やマスク、ライムとマンゴーの葉などを吊るしたり、壁に手形を描く場合も同様である。これらはいずれも邪視の注意を集めたり、あるいは邪視を跳ね返したりすることで、その妬みなどから発生する災いが家屋本体に降りかかるのを避ける役割を果たしている。

こうした邪視除けには土器や土器片が用いられることが多い(Malone 1976: 114)、土器の象徴的な利用として無視できない。平屋根の上や畠などに逆さまにして置かれた土器を見かけることがある(図13)。土器片は、屋根が藁葺きの場合に置かれることが多いようである¹⁸⁾。とくに土器は使い古して黒く煤が付着したものが多く、逆さまにして中身が空であることを、また汚れたり破損して欠けらとなつた土器はこの家に妬みを買うような財産や富がないことを表現したものと考えることができよう。もちろんこれはあくまでも邪視対策であって、現実の生活の経済状況とはかならずしも一致しない。むしろ裕福な家の方が、周囲の妬みの対象となって邪視の被害に合いやすいとされる。



図13 畠の邪視除け（パキスタン、パンジャーブ州ハラッパー村）

しかもこのような邪視に対する考えはヒンドゥー教徒にとまらず、イスラーム教徒の間にも見ることができる。宗教間の差異あるいは類似について、今後さらに詳細な比較検討をしていく必要があろう。

まとめ

以上で概観したように、インドにおける土器の機能は、単に水や穀物を貯蔵したり調理に使うことにとどまらない。土器はまた儀礼の場においても不可欠で、ときには崇拜の対象ともなり、神聖な、あるいは特殊な力をもつものとして位置づけられている。このように土器の機能には物質文化的側面とともに精神文化的側面のふたつがあるが、これを改めて確かめることができた。これらが両立することで、初めて土器がその社会において真の役割を果たし、文化としての土器の世界が成立することはいうまでもない。しかもとくにその精神文化的側面についてみると、儀礼や信仰に関わる象徴的な「意味」が付与されるのは単に土器にとどまらず、その製作の際に用いられる各種の道具のほか、土器職人までおよぶ。それがいわば、土器製作と使用（消費）の体系全体におよんでいることは、大きな特徴であるといえる。

当然ながら、考古学的事象においては、こうした「意味」は類推することさえ難しい。しかし少なくとも土器の役割や機能、あるいは使われ方がこのようにきわめて多岐にわたることを確認しておくことは、土器とは何かを考察していく上でも避けては通れない課題であろう。

一方で、インドにおいては今日、土器そのものの需要は減少傾向にあり、金属やプラスチック製品が台頭しつつある。こうした社会的状況の変化のなかで、土器の製作や使用に関わる「伝統」やそこに付与されている「意味」がどのように変化を遂げていくことになるのか、民族例から学ぶべきことは多い。本稿では全体的な見通しが得られたに過ぎないが、さらに他の地方や宗教、宗派、カーストなどそれぞれ個別の事例研究を蓄積し、インドのみならず南アジア全体における土器研究の深化をはかることが求められている。

以下の方々に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。私たちのために作業を中断し、多大なる時間を割いて下さったタラサラ村の土器職人の方々；本稿の基礎となったタラサラ村の調査を共同で行なったデカン大学のソニヤ・B. カール氏とエリザベス・タマス氏；文献の収集に際して尽力下さったデカン大学図書館長 M. K. クルニー氏とマルショウ貿易書籍部の三ツ堀幸男氏；本稿執筆の機会を与えて下さった日本西アジア考古学会；本稿執筆に際して多くのご教示を頂いた東海大学の近藤英夫氏。

註

- 1) 古代文献における土器や土器職人の記述は少なくない (Deo 1952; Pandey 1969; Roy 1969; Auboyer 1994: 93-94; Singh 1995など)。一方、民族調査あるいは産業製品の調査の一環として、南アジアで作られる陶器やガラス製品がイギリス人によって記録され始めたのは19世紀末のことである (Baden-Powell 1872; Birdwood 1880; Halifax 1892; Gait 1897—以上筆者未見; Rye and Evans 1976: 1-3)。しかし当地における土器研究の重要性が真に認識されるようになったのは、1921年のインダス文明の発見に端を発している。これが転機となって、単に美的にすぐれた製品の紹介というだけでなく、成形や施文、焼成などの製作技法にも徐々に関心が持たれるようになっていった (Mackay 1930; Dikshit 1946)。このことはまた同時に、現在各地の村に伝わる「伝統的な」土器製作・使用に注意が向けられる結果を生むことになる。
- きわめて散発的ながら、インド・パキスタン分離独立後の1950年代頃までに、ロクロの形状の地方差、型や叩き板の形状、器面調整や彩文、女性による回転台および粘土紐巻き上げと叩きを用いた技法、あるいは後産の埋納といった土器の使用などについての報告がなされている (Mackay 1930; Ghurye 1936, 1937; Aiyappan 1947; Betts 1950; Rawson 1953; Das 1956; Allchin 1959, 1978; Bandopadhyay 1961)。こうした初期の研究者たちの注目を集めたのが、ロクロで大まかな形状を整えたのち叩きによって最終的な形に仕上げていく二段階の成形技法で、これは南アジアの土器製作の大きな特徴とされた (Dumont 1952; Ghosh 1953; Foster 1956, 1959; Raven-Hart 1962; フォスター 1972)。
- その後の研究をさらに本格化させる大きな画期となったのが、インドにおいて1961年度国勢調査の一環として行われた、全国各地の土器製作の報告である。多数におよぶ調査事例が *Bulletin of the Anthropological Survey of India* 誌上に発表されたほか、一部は報告書としてまとめられている (Sharma 1964; Datta and Burman 1971など)。またこれらインド全土の306カ所にわたる調査結果を総括した Saraswati and Behura 1966, Saraswati 1979 は、製作技法のみならず土器職人の社会的宗教的背景などについても触れており、インド土器研究のバイブルとして有名である。一方パキスタンについては、Yoshida 1972 (筆者未見) や各地の製作技法の詳細をまとめた Rye and Evans 1976 が知られ、ネパールについては Birmingham 1975 などがある。
- 今日に至るまで製作技法の調査はひきつづき行われているが (Fischer and Shah 1970; Behura 1978; 米田 1988, 1993; Kar et al. 1995; 関根 2000など)、社会的背景や市場と流通、文化変容から見た技法の変化や儀礼的背景にも視点を当てた報告も少なくない (Gupta 1969; Miller 1985; 鹿野 1987; Kramer and Douglas 1992)。
- 2) 筆者らが訪問した1991-92年時の、土器製作以外の職に就いていた23名の内訳=ダイアモンド研磨工11名、ダイアモンド商人6名、石工1名、トラック運転手1名、教員1名、雑貨店1名、警官1名、ビジネスマン1名。
- 3) プラジャーパティ(「子孫の主」の意)神とプラフマー神はそれぞれ『ヴェーダ』と『プラーフマナ』文献に登場する創造神・造物主で、ほぼ同一視されている。
- 4) 土器職人ジャーティーの社会的位置づけは地方ごとに異なり、一概に判断はできない。そもそも同ジャーティーが浄であるか不浄であるかの判断も地方ごとに一定ではない (Saraswati 1979: 128-129)。
- 5) ただし女性がロクロを使用する例が、わずかながら南インドのニルギリ地方で報告されている (Behura 1967)。
- 6) シュリー・ファル(吉祥の実)とも呼ばれ、豊穣あるいは女神を象徴するものとして多くのヒンドゥー教の儀礼で用いられる。一方、実を割って中の果汁を搾りものとするが、これをかつての人身供犠(頭)の名残とする見方もある。
- 7) 月経の出血のために女性は「不浄」視される (Saraswati 1979: 85)。
- 8) 未確認ながら、生理中の女性は土器製作のすべての作業を行なうことがタブー視されていると思われる。たとえば、とくにヒンドゥー教徒の家庭では、生理中の女性は調理にさえたずさわらない場合が多い。
- 9) 訪れた一行が、中庭で以下のような歌詞の短い歌を歌う場合・地方もある。「その鼻が宝石と真珠で飾られたガナパティ神よ」「土器職人さん、クリシュナが結婚するときに土器(kalash)を作りましたか? 私はクリシュナが結婚するときに土器を作りました」 (Miller 1985: 125)。
- 10) 朱粉は本来は供犠の動物の血、あるいは生命力を象徴するものといわれ、今日のヒンドゥー教徒の間では祭祀などで一般的に用いられる。額中央につけたり(本来は第三の目を表すと説明されることがある)、既婚女性が頭中央の毛の分け目に一筋塗るものもある。
- 11) これらに加え、1ルピーと25ペイサのコイン各一枚が渡される場合もある。調査時の1991年当時のレートで1ルピー(100ペイサ)=約7円ほどで、これは現地においてミルク・ティー一杯ほどの値段になる。しかしこれは金額の問題ではなく、「供物としての財宝」を象徴的に表現したものといえる。またとくに1ルピーと25ペイサについてであるが、インドの多くの地方では結婚式などのご祝儀に渡す金額としてこうした端数を含む数字が好まれている。大きな金額であれば、たとえば101、1001といった端数を含むものが良いとされる。この習慣を、少しでも多く渡したいという気持ちの現れであると説明する現地の人もいる。したがって厳密には1ルピーと1、5、ないし10ペイサで目的は達せられるが、こうした小額のコインの流通がきわめて限られており、容易に入手可能な最小の単位のコインが25ペイサである、といった事情が背景にあると思われる。
- 12) 地方によって1対の土器の形状は異なるが、赤、白、緑の3色が用いられるのはロクロ儀礼に付随して渡されるこれらの土器に共通する。筆者が実見したサウラーシュトラ半島西部のクンターシー村の場合には、小さな注口のついた碗形土器(上)と壺形土器(下)が2対となっていた。いずれも赤、白、緑、さらに黄色で彩色されていた。ここでは土器には水が満たされ、これらを重ねた上にココヤシの実を乗せる。土器とココヤシのいずれにも新郎の姉妹によって朱粉がつけられたのち、彼女が頭上に乗せて帰る。また地方によっては壺の数が7つの場合があり、これは神話上の7つの海を表しているという。
- 13) 通常ヒンドゥー教の神々はこうしたお供の乗り物をもっており、それぞれの神とともに崇拝の対象となることが多い。
- 14) 壺 ghaggar(金属属性) 2つ、中型の壺 hando 2つ、小形の壺 gujadiyo と chakli 各1つを下から順に積み上げたもの。このうち後者の2つはロクロ儀礼で受け取るものと同形のもの。最上部に置かれた chakli(スズメの意)は飛び立つ鳥を表し、結婚して新たなる家庭に入る新婦を象徴しているという。
- 15) 過去1年間に身内に亡くなった者がいる場合には、この祭礼を行なわない。
- 16) bhadrakumbha, bhadraghata, bhadranidhi, amrta-kalasa,

- kalasa-ghata, varsamanaなどとも呼ばれる(Stutley and Stutley 1977: 136)。
- 17) 周囲の人々の好みのほか、社会的地位や特殊な技能、性格や年齢、肉体的特徴などさまざまな「力」が邪視の源となりうる。その背景には社会的秩序が破壊されることへの不安や社会的逸脱行動の抑制、経済水準の平均化を志向する意識が働いていると説明されることが多い。ただし邪視の発生源はかならずしも人間とは限らず、動物や惡靈などとする場合もあり、各事例・地方ごとに解釈が異なる。邪視信仰の実態は、非常に複雑であると思われる。
- また土器製作に関しても、窯で焼いた土器が割れてしまった理由を邪視に求める場合があるが(Malone 1976)、残念ながら邪視についての調査はタラサラ村では行なっていない。
- 18) 土器片には、邪視の注意を集めやすいように派手な文様などが描かれる。

引用・参考文献

- Aiyappan, A. 1947 Handmade Pottery of the Urali Kurumbars of Wynad, South India. *Man* 47: 57-59.
- Auboyer, J. 1994 *Daily Life in Ancient India from Approximately 200 B. C. to A. D. 700* (translated from the French by S. W. Taylor). New Delhi, Munshiram Manoharlal.
- Allchin, F.R. 1959 Poor Men's Thalis: A Deccan Potter's Technique. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 22: 250-257.
- Allchin, F. R. 1978 The Archaeological Significance of a Modern Indian Potter's Technique. In D. Chattpadhyaya (ed.), *History and Society: Essays in Honour of Prof. Nihar Ranjan Roy*, I -14. Calcutta, K. P. Bagchi & Company.
- Baden-Powell, B. H. 1872 *Handbook of the Manufacture and Arts of the Punjab*. Handbook of the Economic Products of the Punjab, Vol. 2. Punjab Government.
- Bandopadhyay, B. 1961 Hira Potters of Assam. *Man in India* 41/1: 25-44.
- Behura, N. 1967 Social and Cultural Aspects of Pottery in Southern and South-Eastern India. *Bulletin of the Anthropological Survey of India* 13/1-2: 114-123.
- Behura, N. 1978 *Peasant Potters of Orissa*. New Delhi, Sterling Press.
- Betts, F.N. 1950 Tangkhul Naga Pottery-Making. *Man* 50: 117.
- Bhatt, R., R. Nayal, V. Mohan, A. Nagesh, J. Tiwari and S. Shah (compiled) 1993 *The Living Indian Traditions of Pottery and Terracotta*. Bhopal, Indira Gandhi Rashtriya Manav Sangrahalaya Publication.
- Birdwood, G. C. M. 1880 *The Industrial Arts of India*. London, South Kensington Museum Art Handbooks.
- Birmingham, J. 1975 Traditional Potters of the Kathmandu Valley. *Man (New Series)* 10/3: 370-386.
- Chakravarty, D. K. 1971 A Note on Proto-Historic Burial Urns. *Man in India* 51/1: 6-49.
- Chandra, R. G. 1983 The Poorna Kumbha. In R. S. Nathan (ed.), *Symbolism in Hinduism*, 341-345. Bombay, Central Chinamaya Mission Trust.
- Chandra, R. G. 1996 *Indian Symbolism: Symbols as Sources of Our Customs and Beliefs*. New Delhi, Munshiram Manoharlal.
- Coomaraswamy, A. K. 1980 *Yaksas*. New Delhi, Munshiram Manoharlal.
- Crooke, W. 1926 *Religion and Folklore of Northern India*. London, Oxford University Press.
- Das, B. M. 1956 A Note on the Hira Potters of Assam. *Man in India* 36/3: 199-202.
- Datta, M. S. and B. K. R. Burman 1971 *Pottery at Kumbharwada, Bombay*. Census of India 1961, Vol. 1, Part 7/6. New Delhi, Directorate of Census Operations.
- Deo, S. B. 1952 Pots and Utensils from Jaina Literature. *Bulletin of the Deccan College Research Institute* 14/1: 33-42.
- Devi, S. M. 1969 Potters and Potteries in Ancient Indian Inscriptions. In Sinha 1969, 229-240.
- Dhavalikar, M. K. 1984 Chalcolithic Cultures: A Socio-Economic Perspective. In K. N. Dikshit (ed.), *Archaeological Perspective of India Since Independence*, 63-80. New Delhi, Indian Archaeological Society.
- Dikshit, K. N. 1946 The Dawn of Civilization in India. *Bulletin of the Baroda State Museum and Picture Gallery* 2/1: 3-13.
- Dobbs, H. R. C. 1895 *A Monograph on the Pottery and Glass Industries of the North Western Provinces and Oudh*. Allahabad, North Western Provinces and Oudh Press.
- Dumont, I. 1952 A Remarkable Feature of South Indian Pot-Making. *Man* 52: 81-83.
- Fischer, E. and Haku Shah 1970 *Rural Craftsmen and their Work: Equipment and Techniques in the Mer Village of Ratadi in Saurashtra, India*. Ahmedabad, The New Order Book.
- Foster, G. M. 1956 Pottery-Making in Bengal. *Southwestern Journal of Anthropology* 12: 395-405.
- Foster, G. M. 1959 The Potter's Wheel: an Analysis of Idea and Artifact in Invention. *Southwestern Journal of Anthropology* 15: 99-119.
- Gait, E. A. 1897 The Manufacture of Pottery in Assam. *Journal of Indian Art* 7/54: 5-8.
- Ghosh, A. 1953 A Remarkable Feature of South Indian Pot-Making. *Man* 53: 48.
- Ghosh, A. 1989 Potters' Dabbers. In A. Ghosh (ed.), *An Encyclopedia of Indian Archaeology*, I, 329. New Delhi, Munshiram Manoharlal.
- Ghurye, G. S. 1936 A Note on the Indian Potter's Wheel. *Man in India* 16/1: 68-71.
- Ghurye, G.S. 1937 Disposal of the Human Placenta: The Normal Asymmetry of the Human Body. *Journal of the University of Bombay* 6/1: 1-65.
- Gupta, S. P. 1969 Sociology of Pottery: Chirag Dilli, A Case Study. In Sinha 1969, 15-26.
- Gupta, S. P. 1972 *Disposal of the Dead and Physical Types in Ancient India*. Delhi, Orient Publishers.
- Halifax, C. J. 1892 *Monograph on the Pottery and Glass Industries of the Punjab, 1890-91*. Punjab Government.
- Joshi, J. P. and A. Parpola 1991 *Corpus of Indus Seals and Inscriptions, Vol. 1, Collections in India*. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.
- Kar, S. B., M. Koiso and E. Thomas 1995 Pottery Traditions at Tarasara, District Bhavnagar, Gujarat. *Bulletin of Deccan College Post-Graduate & Research Institute* 53: 143-185.
- Kramer, C. and J. E. Douglas 1992 Ceramics, Caste and Kin: Spatial Relations in Rajasthan, India. *Journal of Anthropological Archaeology* 11/2: 187-201.

- Mackay, E. 1930 Painted Pottery in Modern Sind: A Survival of an Ancient Industry. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 60: 127-135.
- Maloney, C. 1976 Don't Say "Pretty Baby" Lest You Zap It with Your Eye: The Evil Eye in South Asia. In C. Maloney (ed.), *The Evil Eye*, 102-148. New York, Columbia University Press.
- Miller, D. 1985 *Artefact as Categories: A Study of Ceramic Variability in Central India*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Nandi, P. N. 1968 Pot-Worship and Pot-Goddess of the Deccan (c.A.D. 600-1000). *Proceedings of the Indian History Congress, XXIX Session, Patiala (1967)*: 113-117.
- Pandey, M. S. 1969 Potteries in the Brahmanical Literature. In Sinha 1969, 155-160.
- Raven-Hart, R. 1962 The Beater-and-Anvil Technique in Pottery-Making. *Man* 62: 81-83.
- Rawson, P. S. 1953 The Surface Treatment of Early Indian Pottery. *Man* 53: 41-42.
- Rice, P. 1987 *Pottery Analysis: A Sourcebook*. Chicago, University of Chicago Press.
- Roy, B. P. 1969 Literary Reference to Pottery. In Sinha 1969, 261-274.
- Rye, O. S. and C. Evans 1976 *Traditional Pottery Techniques of Pakistan*. Washington, Smithsonian Institution Press.
- Saraswati, B. 1979 *Pottery-Making Cultures and Indian Civilization*. New Delhi, Abhinav Publications.
- Saraswati, B. and N. K. Behura 1966 *Pottery Techniques in Peasant India*. Memoir 13. Calcutta, Anthropological Survey of India.
- Sharma, R. C. 1964 *Pottery Industry in Uttar Pradesh*. Census of India 1961, Vol. 15, Uttar Pradesh, Part 7/A. Handicrafts Survey Monograph 3. New Delhi, Directorate of Census Operations.
- Singh, B. 1995 *The Vedic Harappans*. New Delhi, Aditya Prakashan.
- Sinha, B.P. (ed.) 1969 *Potteries in Ancient India*. Patna, Department of Ancient History & Archaeology, Patna University.
- Sinopoli, C. M. 1991 *Approaches to Archaeological Ceramics*. New York, Plenum Press.
- Stutley, M. and J. Stutley 1977 *A Dictionary of Hinduism, Its Mythology, Folklore and Development 1500 B.C.-A.D. 1500*. London, Routledge & Kegan Paul.
- Yoshida, M. 1972 *In Search of Persian Pottery*. New York, John Weatherhill.
- 鹿野勝彦 1987 「ベンガル農村のクマール（土器つくりカースト）—バングラデシュ、タンガイル県ミルザプールの事例から」『民族学研究』52巻2号 103-128頁。
- 木下 忠 1981 「埋甕」雄山閣。
- 小西正捷 1985 「土器つくりの技術と集団」辛島昇編『インド世界の歴史像』112-124頁 山川出版社。
- 小西正捷 1989 「南アジアの土器」アジア民俗造形文化研究所編『アジアの土器の世界』173-210頁 雄山閣。
- 宗臺秀明 1993 「南アジアのかわらけ」『鎌倉考古』2号 51-53頁。
- 関根光宏 2000 「インド西部ベンガル州における土器およびその製作技術」『物質文化』68号 32-53頁。
- 常松幹雄 1993 「駅弁と考古学」福岡市教育委員会編『吉本本町遺跡』1 45-53頁 福岡市教育委員会。
- 西田泰民 1986-89 「土器録（1～12）」『東京の遺跡』No. 11(3): 141, No. 12(4): 154, No. 13(2): 164, No. 14(3): 181, No. 16(3): 205, No. 17(5): 223, No. 18(4): 238, No. 19(4): 250, No. 20(6): 264, No. 21(6): 280, No. 22(5): 295, No. 24(4): 318.
- フォスター, G. M. (佐原 真訳) 1972 「ロクロ」(土器の話 9)『考古学研究』19巻1号 79-101頁。
- 堀江敏樹 1996 「カルカッタのチャイ屋さん」南船北馬舎。
- 宮治 昭 1981 「インド美術史」吉川弘文館。
- 米田文孝 1988 「インドにおける土器製作技術：I」網干善教先生 華甲記念会編『網干善教先生華甲記念考古学論集』1035-1062頁 網干善教先生華甲記念会。
- 米田文孝 1993 「インドにおける土器製作技術：II」関西大学考古学研究室編『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』1083-1120頁 関西大学。

小磯 學
東海大学文明学科
Manabu KOISO
Tokai University